

初級クラスにおけるフランス語発音の指導方法

著者	豊永 知恵子
雑誌名	仏語仏文学
巻	26
ページ	95-112
発行年	1999-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017373

初級クラスにおける フランス語発音の指導方法

豊 永 知 恵 子

§1 はじめに

朝倉季雄は『フランス語教育1』（1972年号所収，p. 12-3）で「教授法は懇切丁寧な説明をさけて，大部分の時間を口頭によるドリルに当てます。」「教授者が教壇を降りて学生の間にはいっていき，学生も積極的に授業に参加し，教授者と学生とが一体となって授業が成立するといった感じ です。この方法は構文だけでなく，聞き取り，発音の力をも同時に養う長所があります。」と述べているが，四半世紀を経た現在でも充分耳を傾けるに値する。

筆者は1979年以来数ヶ所の私立大学等¹⁾で初級フランス語を担当してきた。仏文科ではない学生のフランス語選択の動機はそれほど明確でない場合が多い。このような環境におけるフランス語の教え方，特に発音に関する指導方法について体験から得た方法の一部について述べたい。

§2-1 表音文字

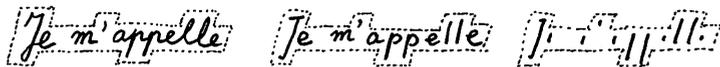
日本語は表意文字と表音文字を使用している。佐伯智義（1997. p. 63-4）に「表意文字の漢字は，その発音を知らなくとも，文字の形から意味が分かる。ところが，アルファベットは，表音文字なので，書かれた文字を発音できなければ，意味が分からない。」[下線は著者]「アルファベットで書かれた言葉は，全文，カナで書かれた言葉と同じなのである。この文字の性格の違いに気づいていないので，日本人の多くは，外国語学習で，発音を重要視しない。そして，あくまでも，目に頼る日本語式の外国語学習法に固執するのである。」とあるが，いったいフランス人の目には文字が

どのように見えているのだろうか。

- ① Mukashimukashiarutokoroniojīsantoobāsangasundeimashita.
 - ② Mukashimukashi arutokoro ni ojīsan to obāsan ga sunde imashita.
 - ③ 昔々 aru 所 ni o 爺 san to o 婆 san ga 住 nde imashita.
 - ④ 昔々 aru 所 ni o 爺 santo o 婆 sanga 住 ndeimashita.
- ①はパッと見ただけでは理解できない。左から一つずつどこで切るのか考えながら慎重に読まなくてはならない。
- ②は①よりかなり読み易い。
- ③は①②とは比べものにならないほど瞬時に意味がわかる。
- ④が日本語の表わし方である。書物に親しんでいない学生に日本語の文を読ませると分節の切り方を誤り意味の取り違えをする原因となる。

我々は②の表わし方を採用している言語を扱うのだから発音を疎かにはできない。

ところでフランス語は②の分節の仕方であるが、アルファベットの印刷文字にしるまた手紙の手書きの文字を見ても、各単語ごとにフランス人も漢字のような形象で認識している面があるのではないかと思われる。基準線より下がるか上がるかによって全体的な凹凸に基づく形があり、それによって表意文字と似た識別をしていると思う。よってこの基準線に合わせて書くことは我々が考える以上に重要なことではないだろうか。



特に最近の学生は筆記体よりも活字体の方をよく使っているためか、大文字と小文字を混ぜたりこの基準線を見捨てた書き方をする。「O」に到っては、  のように気分で上から書いたり下から書いたりしているので答案に「Oui」と書くところをうっかり「Qui」と書くのが必ずいる。やはり文字の書き方についてもひと言指導すべきだろう。

§2-2 綴字記号

アルファベット26文字の他にアクセント記号の付いているものも別の文字

の一つであると説明する方がよい。アクセント記号が付くことで読み方が異なる場合など大切な役割があるのに英語にはそれがない為がいい加減に扱っている学生が多い。日本語でも濁点や半濁点が付くことで音が「ほ、ば、ぼ」と変わるし漢字は「大、犬、太」と「大」のどこに点が付くかが決っており、好みで付け方を変えることはできない。「帽子」を平仮名で書くと「ぼうし」であって「ほうし」と書いたあとに濁点を打つことはしない。これと同じく élève は、eleve と書いた後でアクセント記号をつけるのではなく、é→l→è→v→e と各文字毎に必要なアクセント記号をつけてゆく。

§2-3 音と綴の関係

第1回目の授業は発音の台形を使用して細かく説明するよりも、さっそうく発音しながら次のように板書する。

[ア]… a	ami
[イ]… i, y	ami, mystère
[ウ]… ou	bonjour, chou à la crème
[エ]… é, è, ê, e+子音字	café, très bien, ELLE
ai, ei	maison, Seine
[オ]… o, au, eau	auto, Paul, chapeau
[ワ]… oi	toi et moi, mademoiselle, étoile
[ユ]… u	université

日本語でおおよそ似ている母音として [ア] を発音しながら板書し、その横に a, つまり「日本語の [ア] に当る文字は阿, あ, アで、フランス語は a, この文字の使われている単語には ami (友達) があります。」と説明。そして例に挙げた語は何度も発音練習をやり、少しは「フランス語が言えた!」という気にさせる。音と綴字の関係における規則は、学生も知っていると思われる語句を使えば練習も容易になる。どこかで耳にしたことのある言葉が実はフランス語で、このように書くということから始めればそれほど難しいという印象は与えずにすむだろう。ここで日本語の

[ア] ~ [ユ] の7つの音を取り上げたのは、それらがフランス語の音声に似ており、綴字と発音の面で学生がよく間違いを犯すものに oi [wa] と u [y] があるので、それを先に頭に入れさせてしまうためである。

§ 2-4 母音と子音の違い

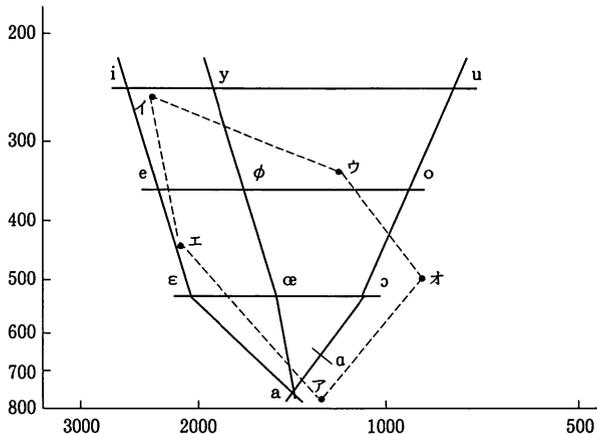
「母音と子音の違いは何ですか。」²⁾

母音の台形などで説明するより前に、非常に基礎的なことをはっきり理解していない学生が存在する。滝沢隆幸 (1981, p. 13) では「呼気が空気の通路を通過する際に、口腔の中で摩擦を生じない音を母音といい」「何らかの摩擦を起すことによって生じる音の子音とい」う。両唇で [p, b, m], 唇歯で [f, v], 歯と舌先で一度呼気を止めて [t, d, l, n], 歯茎と舌先で細い隙間を通して [s, z], 硬口蓋で [ʃ, ʒ], 軟口蓋で [k, g, r, ŋ] を生じる。

§ 2-5 母音

5-1) 口母音 (口からのみ空気が出る)

教授法からみたフランス語と日本語の母音の特徴は下のマルンベリ



フランス語の母音図 (口母音)。縦—第1フォルマント。横—第2フォルマント (ピエール・ドラットルによる)。点線は日本語の母音図

(1972, p. 22) の図からわかるように [イ] と [i] はかなり近い。[ア] もほぼ近い。[エ] は [ε] の方に寄っているので [e] の練習が必要。[オ] は [o] の練習が必要。[ウ] については口の開きは [ø] にやや近いので、[u] は特に意識して練習しなければならない。

[i] - [y] - [u]

[i] については、口を横に引っぱってイーと延ばす、と説明した後次のような例を挙げる。

例：X [iks], Y [igrek], ici [isi], fils [fis] 以下同様に、

[u]: 口をぐっとつき出してウーと発音させる。

例：W [dubløve], amour [amur], bonjour [bøʒur]

[y]: ユではないが初心者にはあまり正確さを求めない。

イーウー、イーウーと2回ゆっくり発音させ、3回目は両唇をつき出す直前に途中で止めて [y] を発音させる。そしてイーウー、イーウー、イーユッと練習させる。

次にイーユウー、イーユウーと2、3回発音させて [y] と [u] は両唇をつき出すか否かが重要な点であることを強調する。

例：Q [ky], U [y], université [yniversite], salut [saly]

(([i]) - [e] - [ε] - [a])

[e]: [i] の口の形でエを発音。イーエー、イーエー

例：B [be], C [se], D [de], G [ʒe], P [pe], T [te], V [ve]

été [ete], bébé [bebe], vérité [verite]

[ε]: [i] - [e] - [ε] と調音点を順次下げ、[ε] のところで顎を下へぐっと引く。ヤギの鳴き声と称して メxxxx → ベxxxx とやれば [e] と [ε] の違いがはっきりする。

例：F [ef], L [el], M [em], N [en], R [er], Y [igrek],
Z [zed], avec [avek], elle [el], père [pær], rêve [rev],
merci [mersi]

[a]: 明かるいア、口の前の方で発音する。ア ↗

例：H [aʃ], K [ka], ami [ami], madame [madam], papa [papa]
 ([a]) - [a]

[a]: 暗いア。口を大きく開けて顎を後へ引く。ゆっくり延ばして発音。
 あくびのように ア  と、ぐっと下へさげるのが少なければ
 [ɔ] に近くなる。

例：A [a], âme [am], pâte [pat], vase [vaz]

[u] - [o] - [ɔ] - ([a])

[i] - [y] - [u] と発音し [u] の口の形を確認。

[u]: ここまでくるとやさしく感じるだろう。ただウマ、ウメとは違い
 ウ  マ、ウ  メ。

川上夔 (1978, p. 23) で「日本語の [ウ] [w] は [u] から唇の円めを取り去った母音を表わす」。フランス語はこの逆で唇をつき出すことが重要である。

[o]: [u] の口のままでオを発音。[ɔ] は口の開きが少ないのでオ——と延ばして練習。

例：O [o], mot [mo], dos [do], veau [vo], tôt [to], oiseau [wazo], zéro [zero], rose [roz]

[ɔ]: [u] - [o] - [ɔ], 口をつき出して発音したあと、緊張を緩める。
 ウ  オ  オッ 

例：poche [pɔʃ], pomme [pɔm], homme [ɔm], yacht [jɔt]
 école [ekɔl]

[ø] - [œ]

[ø]: 数字 un, deux, trois の deux の [ø] である。deux をドウ  と発音されると [du] になってしまう。しかし日本語のドウであれば [u] より口の緊張が緩むので [ø] に近づく。下唇はまるめてややつき出す。

例：bleu [blø], feu [fø], peu [pø], queue [kø]

[œ]: ウ  ァの途中、ややア近くで [œ] がきこえる。fleur [flœr] を片仮名でフルールと書いてある参考書を見かけるが、どちらか

といえばフラ—と書く方が近い。seul [sœl] はスア^ル。
 例：peur [pœr], sœur [sœr], heure [œr]

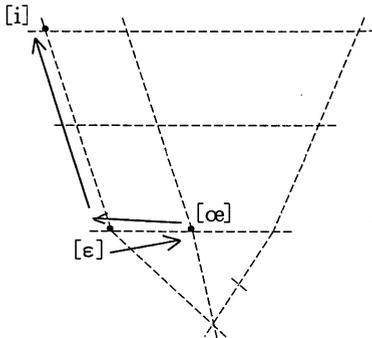
[ø] と [œ] の両方の音が入っているのが heureux [œ r ø]。
 ①の方が口が開き②でややすぼめてのばす。

[ə]: [ø] と [œ] の中間にある脱落性の [ə] は、軽くウである。両唇閉鎖音の [p] や [b] を、後に母音をつけないで発音する。アをつけるとパァ—と延ばせるし、イをつけてもピィ—と延ばせる。何もつけないでプツと発音しても、子音は母音の支えがないと発音できないので自然について出てくる音が [ə] である。

応用1—短文の中で。

Quelle heure est-il ?

[kœ·l œ·r ɛ·t il]



[ɛ] → [œ] → [ø] は顎の下げ方は同じで [ɛ] より [œ] の方が口をややまるくする。

まず思いきりベxxxxーと顎を引き [ɛ], 次に唇を少し押し出して [œ], 再度引き [ɛ], 思い切り横に引っぱって [i]。

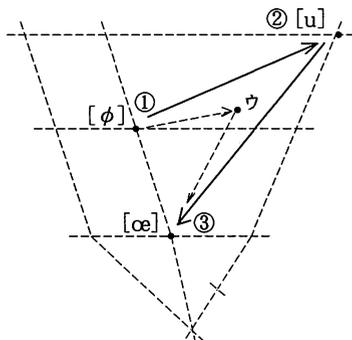
ケ—ラ → ヘッチイ^ル。

応用2—動詞の活用で。

[ø] [œ] [u] の出現する動詞に vouloir と pouvoir がある。学生は全部ウとしてしか聴き取っていないので活用を書き間違えることが多い。

vouloir je veux }
 [ϕ] } ①
 tu veux }
 [ϕ] }
 il veut }
 [ϕ]

nous voulons }
 [u] } ②
 vous voulez }
 [u] }
 ils veulent } ③
 [œ]



un, deux, trois の deux を思い出し、まず je veux, tu veux, il veut と同じ調子で発音。

次にぐっと口をつき出し強調して
 nous voulons ヌーヴーロ
 vous voulez ヴーヴーレ

最後は落ち着いて ils veulent

イルヴウア → ル

日本語のウ [u] は平唇母音であるから特に② [u] をしっかりきつく発音しないと [ϕ] - [u] - [œ] となって識別が困難になる。

§ 2-5-2) 鼻母音 (口と鼻の両方から空気が出る)

[ã]: 口を大きくあけてア—ア—アと3回のみ鼻から息を出す。

ア—ア—で口の形は固定し、んを出現させないようにする。アンと書くと文字につられて口を閉じてしまうのでア。ア—よりアの方が暗い音色になる。

[ã] はアとオの間のようにもきこえる。

綴字: an (m), en (m)

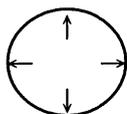
例: France [frãs] … [fa—fa—fra] を先に練習。

[fas—fas—frãs]

母音は [ã] 1つしかないので1拍で発音する。

enfant [ãfã] … [ãã, ãã, ãfã]

en と an は同じ音。2拍で発音する。



[i] → [j]

piano [pjano]: [pi·a·no, pja·no] のリズムで発音させ [j] の存在を確認させる。

soleil [solɛj]: [j] が語末にあるときは、学生はソレーユと発音しがちなので特に強くソーレイユと2拍³⁾で発音させる。

travail [travaj]: 雑誌の名称のせいでトラバーユですませる者が多いので注意が必要。トハヴァイユ 2拍である。

[y] → [ɥ]

cuisine [kɥizin]: キュー・イー・ズィーヌ, キュイ・ズィーヌ
3拍, 2拍のリズム。

(je) suis [sɥi]: スュー・イー, スユイ
2拍, 1拍のリズム

[u] → [w]

oui [wi]: ウー・イー, ウイ
2拍, 1拍のリズム。

§2-6 子音



[r]: どのように発音するのか、よく尋ねられるのが [r] である。

舌尖を下の前歯の裏側にあて、舌背を軟口蓋の方へ持ち上げて空気の流れを狭くして発音。舌尖は動かさない。

例: art [ar]: [a·a·ar] と3回目に[r]を発音。いかにも疲れたように[r]の発音と同時に肩を落とすと出しやすい。

アー・アー・ア → ハ

merci [mɛrsi]: メ・ル・シー はダメで

[mɛr·si] メ・スィー, メ・スィー, メッ・スィ。

[l]: 簡単そうだが舌先を上の前歯の裏側に押しつけて発音する。手鏡に写せば舌の裏側が見える。



例: Paul [pol]: ポーポーポール で止めると舌先が歯についたままである。

Allô [alo]: アローよりアッローの感じ。

川上夔（前掲書，p. 51）では「日本語で「あれ，まあ」と「あッれ，まあ」では「れ」の音が異なる。」後に [l] が使われている。

[f]: 口は半開きで上の前歯が下唇に触れて摩擦音を出す。長く延ばすことができる。日本語では唇の動きはあまり必要としないが，フランス語では大変重要な要素である。「下唇をかむ」という表現もあるが，まず唇をつき出して上の前歯をあてるという説明がわかりやすい。



例: sauf [sɔf], veuf [vœf] などが練習しやすい。[ɔ] や [œ] が円唇母音なので上歯をそえるだけでよい。

例: fort [fɔr], photo [foto], foule [ful], four [fur]

[v]: [f] の有声音である。

例: vous [vu]: 後に [u] があるので自然に下唇が歯にあたる。振動するのを感じるまで強く長く息を出す。

ウ↗ウ↗ヴ~~~~~

[b]: しっかり上下の唇を合わせて息をためてから力強くはき出す。

例: bonjour [bɔ̃ʒur]: [ɔ̃] が支えなので破裂させやすい。口を閉じ，んーボ↘ジュー。

[p]: [b] の無声音である。

川上夔（前掲書，p. 32）では「日本語の [b] は破裂が弱い。語頭以外の位置では特に弱い。パ行の子音は，語頭では確かに破裂音だが語頭以外では摩擦音 [β] である場合がある。例えば「ば

れる」の「ば」は [ba] だが「あばれる」の「ば」は [βa] である場合がある。」

[ʃ]: サシスセソのうちシのみが近い。

シューシューポッポのシュー

ウ↗ウ↗シュ~~~~

口をとがらせて舌を浮かせると舌の中央がへこんで空気がシューッと通るのが感じられる。

例: chou à la crème の chou [ʃu]

[ʒ]: [ʃ] の有声音

これは [dʒ] になっている場合が多いから要注意。

ウ↗ウ↗ジュ~~~~ で舌を浮かす。

例: Japon [ʒapɔ̃]: 口をつき出して準備してから

(ウー) ジャア↗ポ↘に近い。

[s]: サシスセソのサスセソ。

口はつき出さない。上下の歯を合わせてその裏に舌先を近づけてスー

例: monsieur [mɔ̃sjø]: [s] のあとに [j] があるため [ʃ] になりやすいので要注意。

ムッシューではなくてムッスィュー

merci [mɛrsi]: メ・ル・シーではなくてメッ・スィー

[z]: [s] の有声音である。

[ʃ] - [ʒ] - [s] - [z] の応用

例: chanson [ʃɑ̃sɔ̃]: 口をつき出して [ʃɑ̃], 次にひっこめて [sɔ̃]。

最後は [o] の形で、少し開きぎみで終る。

シャ↘ソ↘

Je suis japonaise. [ʒø sɥi ʒapɔ̃nez]

口をつき出して [ʒø], 引込めて [s] やや押し出しぎみで [sɥi],

口をつき出して [ʒa pɔ̃nɛ], 最後は口を開く。上下の歯を合わせるようにして [z]。これは何も考えずに発音すると

ズスイザポネーズになる。習い始めによく出てくる文なのでしっかり練習させる。

§2-7 h muet と h aspiré

h は発音しないのに二種類あると説明し、初心者を混乱させてしまうことが多い。慣れるまでの便宜上、印 (†) の付いていない h (muet) には斜線を引き、印 (†) の付いている h (aspiré) は○で囲むように指導する。

Homme Histoire …… h muet
 (h)éros (h)aricot …… h aspiré

これに定冠詞をつけると

le Homme は e と o が母音字なので e が遠慮して l' になると説明。
 le (h)éros は e と h なので母音字が重なるのではないから le はそのままであると。

発音するときは (h) のところで「ん！」と軽くストップをかけるようにしている。一度切ってやると続けて発音できなくなるからである。

ソヴァージュ (1972, p. 118., 福井芳男, 田辺保子訳 p. 142) では、「状況によっては、声帯が突然閉じたときに得られる音を発する人も何人かいます。この音は言語学者達が《声門閉鎖音》と呼んでいるもので、いわゆる有音の [h] で始まる語の中に表われます。例えば、

la haine, je le hais, une hache, thès haut など、
 しかしほとんどの人はもうそれを発音しないで、ちょっと間を置く位です。つまり綴字法で h の付く母音の前で音節を切るのです。

le hasard [lə / azar]」

§2-8 liaison, enchaînement, élision

リエゾン等をするかしないかでどう違って聴こえるかということを学生の耳に感じさせなければならぬ。そのためには単語を切って読むことと、続けて読むことを並行してリズムカルに聴かせるのが良いと思われる。

◦ **liaison** の場合 :

des amis	[de, ami, de•za•mi]	デー, アミ, デザミ
petit ami	[p(ə)ti, ami, p(ə)ti•ta•mi]	プチ, アミ, プチタミ
ils ont	[il, ɔ̃, il•zɔ̃]	イル, オ, イルゾ
chez elle	[ʃe, ɛl, ʃe•zɛl]	シェー, エル, シェゼル
un héros	[œ̃, ero, œ̃, ero]	ア, エホ, ア, エホ

◦ **enchaînement** の場合

une amie	[yn, ami, y•na•mi]	ユヌ, アミ, ユナミ
cinq heures	[sɛ̃k, œr, sɛ̃•kœr]	サク, ア, サカ
il a	[il, a, i•la]	イル・ア, イッラー
avec elle	[a•vɛk, ɛl, a•vɛ•kɛl]	アヴェク・エル, アヴェケル

◦ **élision** の場合

j'aime	[ʒə, ɛm, ʒɛm]	ジュ, エム, ジェーム
l'ami	[lə, ami, la•mi]	ル, アミ, ラーミ
l'homme	[lə, ɔm, lɔm]	ル, オム, ローム
le héros	[lə, ero, lə, ero]	ル, エホ, ル, エホ

はじめ、2拍で、次にまとめて1拍で読めば、リエゾンなどが行なわれていることがはっきり耳で聴きとれる。

§ 2—9 数字の暗唱

数字の発音練習は1~20程度で終わってしまうことが多いと思う。算用数字で書かれてあれば見てわかるからである。しかし実際は、日付、時刻、買物の分量・値段等、日常生活で必ず用いるものであるし、耳から入ってくることが多い。数字の読み方でいちいちストップがかかっては不便この上ない。これほど文法知識がいらなくて、慣れさえすれば、すぐ役に立つものも他にはあまり見当たらない。1~100まで言えれば数字はすべてできるに等しい。

1 | 2 3. 4 5 | 6. 7 8 9

日 本 語 (4桁づつ): 1億2345万6789

フランス語（3桁づつ）： 123 millions 456 mille 789 となる。
 999の次は1000つまり mille や million(s) になるから999が最大数になる。
 これは100が9コと99に分解されるから99までが発音できて聴き取れば
 ほぼ完了となる。

昔の二十進法の名残があるのでまず1～20をていねいに練習する。
 sept は [set] となり， [p] はないので，学生が教室の後ろの方に座っ
 ても，口をつむったら [p] を発音していることになるから必ず訂正
 する。

un, deux, trois || quatre, cinq, six ||
 [œ̃ dø trwa || katr sɛ̃k sis ||]
 ㄨ̃ ドゥ トホア || キャト サク スイス ||
 ↗ ↗ ↘ ↗ ↗ ↘
 sept, huit, neuf, dix
 [sɛt ɥit noɛf dis]
 セート ユイートヌーフ ディス
 ↗ ↗ ↗ ↘
 onze, douze, treize || quatorze, quinze, seize ||
 [ɔ̃z duz tʁɛz || katɔʁz kɛ̃z sɛz ||]
 ㄨ̃ズ ドゥーズ トヘーズ || キャトーズ キㄨ̃ズ セーズ ||
 ↗ ↗ ↘ ↗ ↗ ↘
 dix-sept, dix-huit, dix-neuf, vingt
 [disɛt dizɥit diznoɛf vɛ̃]
 ディセート ディズユイート ディズヌーフ ヴァ
 ↗ ↗ ↗ ↘

3・3・4，3・3・4のリズムで発音して暗唱する。

1～20までつかえずに言えるようになれば，次は10ずつ60まで増やし
 て行く。次は20ずつ足して80，100で，まず完了。はじめはゆっくりでも
 3・3・4のリズムは守って，そのあとスピードアップする。最終的に
 1～100まで1分半で終了する。多少つかえても2分あれば充分である⁴⁾。

もっと時間がかかるときは語末の読まない e を [ə] として、あるいは [u] (日本語のウ) と読んでいる可能性がある。数字が短時間で言えるということはほとんど暗記しているということになるので、発音に関しては驚くほど美しくなる。[r] は軽快になり [ə] は取れるし、リズムカルに言えると学生の顔も晴れやかになる。数字だけでも「ヤッタ」という満足感が得られるようだ。

§2-10 耳の不自由な学生のこと (難聴者)

今までに女子学生 2 名、男子学生 2 名の計 4 名を担当したことがある。全員クラス、年度は異なる。

そのうちの 1 名 (帝塚山大学, A さん) は読唇術を身につけていた。そしてどう表現したらよいのか、声帯でないところ (頭のてっぺんから音が出ているように思えた) から蚊のなくようなか細くて弱い“声”で話していた。

もう 1 名 (関西大学, B 君) は完璧な予習ののち出席していたようで余裕を持って授業を受けていた。残り 2 人は少し困難が伴うようであった。A さんと B 君は共にクラスでトップの成績だった。

A さんは、会話文を主とした読本使用の 1 年の講読クラスに出席。毎回 dictée を実施したが、こちらの唇の動きを非常によく観察しており、C'est un libre. と、彼女が書いた用紙をみると、筆者は v のところを b と発音していたのか……と大いに反省させられた。これらの学生達との出会いにより、それまで以上に口の形を整えながら注意深く発音するよう努力している。

その他気付いた点として、黒板に向ってつい説明してしまったときは、学生達の方に向き直ってことは尻もはっきりさせて再度説明しなおした。冬は特に、タートルネックのセーターを着用すれば声帯の動きがみえなくなるので、首筋はできるだけすっきりと見えるように気配りをするのがいいだろう。

§3 おわりに

発音教育について、家島光一郎『フランス語教育2』（1973年号所収、p. 1-3）に、「articulation の指導もさることながら *rythme* と *intonation* の教育に、一段と力を入れる必要があるのではなからうか。」「ところで、学生が正しい *rythme* と *intonation* を得るためには教授者はどうすればよいであろうか。まず第一に、教授者自身がそれらを正確に体得していなければならない。」「教授者は、絶えず自分自身の発音の向上に努めねばなるまい。理論的究明にとどまらずに、実践的に発音矯正に精進せねばならぬことを痛感する。」とある。

本論は、初級仏語クラスで最初の2回程度で済まされているのが実情の発音指導について、筆者の体験に基いて述べた。語学は耳からというのが定説であるけれども文字にたよる授業形式が多いのも事実である。しかし最初は耳から慣れる方が困難さも減少するし、何よりも自分で声に出すというのは楽しいことである。そのためにも知っておいた方がいいと思われることを列挙した。何か使えそうな方法があれば実践していただきたい。そして訂正の必要な箇所があれば御指摘いただきたいと思う。

（本学非常勤講師）

参考文献

- 朝倉季雄 「教授法・教材」所感（『フランス語教育1』1972）
 佐伯智義『科学的な外国語学習法』（講談社 1997）
 滝沢降幸『フランス語発音入門』（海出版社 1981）
 ベルティル・マルンベリ『音声学』大橋保夫訳（白水社 1972）
 川上 葵『日本語音声概説』（桜風社 1778）
 Monique Léon, *exercices systématiques de prononciation française 1*
 (Paris, Hachette/Larousse, 1968)
 Aurélien Saurageot, *Analyse du français parlé* (Paris, Hachette, 1972)
 オーレリアン・ソヴァージュ『フランス語の話し言葉』福井芳男、田辺保子訳（駿河台出版社 1986）

- 家島光一郎「発音教育について—rythme と intonation を中心に—」(『フランス語教育』2, 1973)
- マリ=ルイズ・ドノユ=ゴデ『日本人のためのフランス語の機能的発音法』小林正, 戸張規子訳編(駿河台出版社, 1968)
- 佐伯智義『日本人のためのフランス語』(大修館書店, 1989)
- 阿南婦美代『コミュニケーションのためのフランス語発音法—発音の規則と練習—』(駿河台出版社, 1995)
- マイケル・ウェスト『困難な状況のもとにおける英語の教え方』小川芳男訳注(英潮社, 1968)
- アンドレ・ルブレ編『新フランス語教授法案内』長谷川富子訳編(駿河台出版社, 1982)
- 中村啓佑, 長谷川富子『フランス語をどのように教えるか』(駿河台出版社, 1995)

註

- 1) 大阪経済法科大学, 帝塚山大学, 大阪経済大学, 関西大学, 大阪国際大学, 聖母女学院中学校, 平城西公民館。
- 2) 音声を教える際に確たる方法を持たずに教え始めて5~6年経ったころ大阪経済法科大学の学生から受けた質問。
- 3) ここで拍とっているのは母音の数で2拍ならトン, トンと手または黒板を叩きながらリズムをとって発音してみせている。
- 4) 1997年10月~12月, 大阪経済法科大学と関西大学で数を100まで暗記させた。学校間の格差はなかった。関心を持つ学生は, どちらでもできるし, そうでない学生は, いつまでもつかかり, どちらの大学にもできないのが居る。1998年1月~7月, 平城西公民館。月2回の講習会だが約10回で20名全員(年齢35才ぐらい~85才)が100まで暗唱した。30~40の数が一つの山場のようにある。はじめは人のまちがいに気がつかなかったのが自分が言えるようになると, それもわかるようになった。聴き取りにも効果があると思われる。